曽比奈の八王子神社

昭和六十二年二月五日号

二月二十一日は大渕地区曽比奈の八王子神社のお祭りです。八王子神社にはいろいろな言い伝えがありますが、今回はその中から、金の仏像のお話です。

村人を幸せにする神様

昔、大渕の曽比奈に牛や馬の商売をしている人がいました。

ある日、商いの帰りに八王子というところで金の仏像を買いました。そして、家の床の間に飾り、毎朝毎晩おがみました。すると、なすことすべてがうまくいき、村一番の金持ちになりました。

ある晩、夢の中にその金仏が現れて「自分だけ金持ちになるのはよくない。みんなが幸せになれるようにしなさい」と戒めました。

そこで、八つの釜を重ねて仏像を入れ、上から釜でふたをして地中に埋めました。その上にモミの木を植え、村の神様として社殿を建てて八王子神社と名付けました。

それからは、村中の作物もよく実り、みんなの暮らしも楽になりました。

突然の天変地異

あるとき、よその村人が「そんなばかなことがあるか」と、八王子神社の前を馬に乗っていばって通りました。

すると、突然大地がグラグラと揺れ、突風が吹き、黒雲がにわかに天をおおって、雷が鳴り、大雨が降りました。馬は驚いて暴れ、村人は馬から落ちて死んでしまいました。人々は、死がいを馬と一緒に神社の西に埋め、馬頭観音としてまつりました。

疱瘡神とも呼ばれたよ

小野栄さん（八王子本町）

八王子本町の小野栄さんは、「昔は、神社に湧く水が疱瘡に効くといわれ、疱瘡神さんと呼ばれていました。二月二十一日のお祭りでは、青年が演芸をし、そりゃあにぎやかなものでした。今は、昔に比べると寂しいけど、伝統は守ってもらいたいね。」と語ってくれました。